

蛇

と

鳩

丹羽文雄著

蛇 と 鳩

丹 羽 文 雄



朝 日 新 聞 社 刊

昭和廿八年二月廿五日印刷
昭和廿八年三月一日發行

定價二八〇円

著者 丹 羽 文 雄

東京都千代田区有楽町二の三

朝日新聞社

發行者 杉 山 胤 太 郎

東京都台東区龍泉寺町三六五

印刷所 明善印刷株式会社

發行所 朝 日 新 聞 社

東京都丸の内 大阪市中之島
小倉市砂津

投 機

一

雨戸の隙間から、あかりがもれてゐた。ギターが聞えた。つかへ、つかへ弾いてゐる。喉にからんだ声のやうである。胸の塞がる苦しさだつた。一つの余韻がまったく消えてから、おぼつかなく、次のがはじまる。何かわびしかつた。東横線ガード下の稻荷横町であつた。看板もあげてゐないから、昼間は何をしてゐる家か見当もつかない。女がひとり、向うからうつ向いて歩いてきた。呼びかけるやうに、小心らしく、下手くそにギターが鳴つてゐる。女は顔も挙げなかつた。

南口広場から玉電ガード下、道玄坂の方面にかけて、街の女と社交喫茶の客引きが、三々伍々佇んでゐた。この両者の見分けはつけ難い。和服の女が多かつた。

夜の十一時すぎ、銀座方面から地下鉄などで帰つて来るキャバレー、カフェの女給風の女が目立つて多くなつた。東横線、井ノ頭線へ吸はれるやうに消えていく。あそびかへりらしい連中も、まじつてゐた。自動車の数も、多くなつた。待つてゐる車、徐行してゐる車、駆けこんでくる車。澁谷といふところは、あくまで乗換へる駅だつた。私鉄のなくなる十二時すぎまでは、駅附近は自動車で埋まつた。車の洪水。東京中の自動車を呼び集められたのではないかとさへ錯覚をする。

一時がすぎると、さすがに自動車の数は少くなつた。舗道にはまだ人影があつた。酔つぱらひが多い。その一人は、泥んこになつてゐた。ふらふらと歩いていく。顔も半面、泥だらけ。それで案外、性根は失つてゐないのだ。

交番に、二人の男がやつて来た。かなりの服装をしてゐた。交番の時計は一時十五分を指してゐた。

「何ごとですか」

「宇田川町有楽街の、バー・アリセで、ひどいめに遭ひました。今後のため、報告にまゐりました」

「まつたくひどいですよ。たつた一時間位の間ですからね。とりもとつたり、一万三千二百円です。念のため、領收書をとつてやりました」

「税務署へ送つてやりますよ。まつたくひどい。ぼり放題、ふんだくり放題です。そんな營業つてないですよ。二人合はせて、二千円ぐらゐしか残りません。金があつたから殴られずにすんだのですが、まつたくひどい」

「今後のため、十分取締つて下さい」

巡查二人は、聞いてゐるだけである。二人の男が離れていくと、

「なあに、あんなのは一ト晩に、五組も六組もあります。いまに別口のが駆けこんで来ますよ」

交番の中には、背の高い、若い男が長い脚をもてあますやうに腰を下してゐた。五尺八寸はあるだらう。素直な豊富な髪が、青白い額にたれさがつてゐた。女にほしいやうな、強い彫りの二重瞼。一見してこの世界とは関係のない人物とわかる。

自動車が時々、通つた。国電品川行、池袋行はすでになくなつてゐた。貨物列車が通るだけである。息をきらした若い男が、駆けこんできた。不安らしくあとを振り返つてゐる。酔つてゐるらしい。

「おや、さつきの奴だ」と、ひとりの巡查。

「こら、貴様、今度は何をしたんだ。さつきは警視庁巡查といつて、自動車のただのりをしようとした。今度は

何だ」

「ハイ、追つかけてくる奴があるんです。ハイ」

甲高い声で、やたらにハイといふ。齒切れがよかつた。薄いグリーンのギャバジン、ところどころがよれてゐた。

「お前が何かしたから、追つかけられたんだらう」

「ハイ、何もしません。ほんとうです、ハイ」

「無銭飲食だね。さう顔に書いてある。さつきは官名詐称だ。アゲちまふぞ。ポケットのもの、みんな出してみせろ」

皺だらけの十円札が四枚、マッチ、ボタン一個、西洋たばこ、一つ一つの品名をよみあげて、ハイハイと差し出した。

「もうありません。ごみが残りました。ハイ。水をのませて下さい」

とたんに、巡査が大きな声を出した。名を訊かれた。職業は、土建業のトラックの運転手だつた。

「どこでそんなにのんだ」

「ハイ、最初祐天寺で飲んで、それから家にかへりました。ハイ、赤ん坊にお菓子買ってきてやるといつてごまかして……」

「またとび出したのか。そして無銭飲食か」

そこへ二十八九の男がやつて来た。

「ああ、ここにゐた」と、無銭飲食の奴に先廻りされて、ちよつと判断に迷つてゐた。

「この人が、無銭飲食しました。千二百円の勘定です。ボックスに寝こんで、動かないのです。無理やりに起すと、外で払ふといつて……ぐんぐん歩き出して、そのうち、駈け出しました。逃げたんです。宇田川町の『丘の

本』です」少し、東北の訛があつた。

「『丘の木』か。お前は千二百円で、いつたい何を注文したんだ」

「ハイ、何も注文しません。何も見ません。何も食べません」

とほけたやうで、どこか狡い顔。油断がならない。しぶといところもあるらしい。先廻りして交番に駆けこむあたり、一ト筋縄ではいかぬ謀略家だ。

「君、何で千二百円にしたんだ」

「はあ、珈琲とケーキが二つ、それにフルーツです」

「何も注文しません。ハイ、絶対にしません。嘘、いひません、ハイ」

「嘘いつたら罽丸もくか」

「ハイ、もぎます。男です。死にます」

「罽丸だけでいい。死ぬな。君、この男は引つばられたと言つてゐるが、引つばりは違反ぢやないか。うん？ 営業停止だよ。その女を、連れて来なさい」

巡查の一人が、長身の、何者とも判らない交番の客に言つた。

「あのマスター、経堂のデカ上りです。あんなのがゐるので、とりしまりに困ります」

長身の若い男は、弱々しく苦笑した。彼は思ひ出してゐた。深夜、酔つばらつて、この交番の世話になつた。それ以来、彼はこの交番の巡查達と知合ひになつた。酔ふと、妙に、交番へ顔が出したくなつた。癖になつた。彼はつとめて素面のときに限り、寄ることにしてゐた。

「今晚は」

十七八の女が、はいつて来た。女といふより、まだまだ少女の域を脱けてゐない。とまどつた風な魅力があつた。その年頃の、特有の、何ものかに反抗したがる気分が濃い。素人つぽい。さう見られることが残念で、向う

氣ばかりが強いらしい。大人扱ひがされたいのだ。自分から大人つぽく振舞つてみせる。爪先で背伸びをしてゐる。緑のセーター、黒と革の格子のスカート。女は堂々と二人の巡査に向つた。

「引つぱりませんよ。ちり紙買ひにいつて、ぶらぶらしてただけです。そしたら、この人が、ばんすけとまちがへて、君の家へいかうつていふもんだから、連れて来たんだわ」

若さを意識して、胸を張つた。女は客にくつてかかつた。

「注文したんぢやないの。直接はしなくとも、フルーツいい？つたら、いつて言つてたちやないの。珈琲とケーキもいい？つたら、うんうんつて言つたぢやないの。まあずるぶんだわ、あんた、実際男らしくないわね」

「貴様たち」巡査が女に言つた。「酔つぱらひの客をとらへて、ガツガツたかりやがつて。そのたかる根性が情ない。誰だつて、珈琲とケーキとフルーツで、千二百円もとられたら腹が立つ。いいか。客引きしたら、営業停止だ。君も悪い。この野郎、無一文のくせに。社交喫茶が高いくらゐるは、知つてゐるだらう。とぼけやがつて」

女は、十八だと応へた。十日程前に店に出たのだといふ。

「十八ぐらゐで、客引きなんかして……とめてやるぞ」

「いやです。十八では、どうして悪いんです」

「いまからそんなにませて、どうして悪いんだ……」

「ボーイさんが、何でもいいから一人モノにして来いつて言ふんだもの」と、尻尾を出した。

「どこの生れだ」

「江戸つ子よ」朗かである。

マスターが、二十二三の女をつれて来た。

「まあ、ずるぶんだわ。あんた、もう十分、もうあと十分つて、起してもなかなか起きなかつたぢやないの。三万円もつてゐるから、それだけのむんだつて、威張つててさ、実際、男らしくないわ」

押問答がはじまつた。

「とにかく、男同士で話し合ひ給へ」と巡査は投げ出した。

「一銭も払ひません、ハイ」

「どうしてもですか」

「理由は言ひません、ハイ」

交番の客は、にやにやとしてゐた。面白くてならない風であつた。

「よし、お前がそれほどいふんなら、いい。お前は無銭飲食、『丘の木』の方は、引っぱりで違反だから、署までいつて貰はう」

巡査が言つた。ちよつと沈黙になつた。

「自分はですね、ハイ、自分の氣持で半分でも、とにかく払はうと思つてたんです。ハイ、でもですね、それは、マスターがおとなしい、いい人だから払ふんで、ハイ、この女の人たちには、こんな冷たい連中には払ひませんつて言つたんです。ハイ」

「それでいいか」

「ハイ、さうしていただければ、ハイ」

「ぢや、帰んなさい。あちらで二人で、払ふ方法とか期日を相談しなさい。それから『丘の木』は、明日、答申書を書いて持つてくること、何時何分頃どうして引つばつて、どうなつたかといふ書類だ。いいね。忘れるな。両方とも今度、何かしたら承知しないぞ、いいな」

べこべこ頭を下げて、四人は退場した。

「ああして答申書を出せと言つておくと、『丘の木』の方も営業停止をくらふのがこはいから、あの男から金をとらず、沙汰なしにしてくれと言つて来ます。全く世話をやかせる連中です」

パトロールしてゐた一人の巡查が、帰つて來た。若い客にちよつと眼顔で挨拶をしてから、電話をかけた。百軒店で窃盜があつた。が、未遂に終つた。追つたが、どこかへ逃げたと言ひ、電話を切つた。

巡查は歩き疲れてゐた。彼らの交番照察制は、一週間交代であつた。八時から二時、この勤務に限り、終つてから四時までは、本署にゐなければならぬのだ。二時から夜の十時、十時から朝八時までの三勤務制であつた。夜間勤務は、交代で二時間づつ仮眠する。二人はパトロール、二人は交番にゐる。自宅にかへつてもよく眠れないといふ。疲れがひどすぎるからだ。四日目ごろから、小便が赤くなるといふ。

「そんなことを調べて、どうするんですか」と、巡查がいふ。

「いや、別に、ものに書くといふわけでもないのですが、皆さんのさうした毎日の苦勞が知りたいだけです。あんまり世間のひとの知らない苦勞ですからね。知れば、知つたで、何となく僕自身……」

あとはどう形容してよいか、背の高い青年には判らなかつた。にやにやとしてゐた。無邪氣な、弱氣な微苦笑である。巡查も何といふことなしに苦笑する。巡查には、もの好きな青年としか映つてゐない。背の高い男は、夜の駅前の風情が好きだつた。時間による刻々の変化が、面白かつた。それが毎日正確にくりかへされてゐた。昼間玉電のガード下にゐた靴みがきが、場所を夜明しの中華そば屋に譲ると、駅前ハチ公の周辺でアセチリンガスをつけ、商売をはじめるのである。彼は知つてゐた。易者のかへり支度をはじめる時間も、露店の店じまひの時刻も覚えてゐた。夜明けの五時の鐘は、東横の時計だ。チンコロンとひびいた。広場からみると、澁谷駅の真上に月がかかる。国鉄の始發は、上野行が四時十三分、品川行が四時二十五分である。そんなことまで覚えて、どうするのか。どうするあてもないのである。漠然としてゐた。夜更の交番にあそびに來るのも、その動機は漠然としてゐた。彼のからだの中には、漠然としたものが大部分を占めてゐるらしかつた。PL教団か、猿樂の乗泉寺に朝まゐりする人達が、電車からおりてくるのも、彼は目撃してゐる。子供の手をひいた女、若い女、年とつた女の連れなどが、朝早く詣りにいく。男よりも女の方が多かつた。若い女は、多分PL教団の朝詣りであら

う。この教団では、誰でも早朝五時から六時の間に、必ず教団におまわりをしなければならぬことになつてゐた。なまけ者は、入団が出来ない。その日のシキリ（決心）をのべて、P.L.礼拝をして歸つていく。背の高い男は知つてゐた。P.L.礼拝が、両手を高くあげ、肘から先を自分の頭の上で曲げ、手のひらを外に向けるといふ独特のやり方。両手で角を描く形だつた。

先程、一度交番をのぞいて、大勢ゐたので通りすぎた男が、現れた。

「ちよつとお伺ひしますが」何かかんてゐた。チューインガムか。「あのう、社交喫茶店の値段はきまつてゐませんか」

「どうかした」と、巡査。

「金が足りなかつたので、殴られたんですけど、あのう、ご相談したいと思つて、それは足りなかつたのが悪いんですが、その、殴られたりしたの、一体どうなんですか」

「どうなんだつて、君、そこはどこだ。殴られたりして、相談もくでもないだらう」

「いや、その、訴へるつていふんぢやないんです。その、新聞には人民裁判だなんて言つてゐるでせう。だもんだから、ちよつと相談にあがつただけです」

「日本ぢや人民裁判なんかないよ。何のために警察があるのか。どこだ、君が殴られたところは？ 東京は初めてだね」

栃木から出てきたといふ酒屋の息子。あちらこちらで燗酎を一升近くのみ、客引きにつかまり、社交喫茶に入つた。ビール一本、珈琲とケーキで、千三百円の勘定であつた。六百円しか金がなく、結局米穀通帳をとりあげられた。表戸の鍵を下して、十数回殴られたといふ。但し、どこにも傷はうけてゐなかつた。

「社交喫茶つてものは高いつて聞いてましたが、やはり、その助平根性で入つてしまつたんです。それは勿論払ひますが、その、米穀通帳を取りかへさないと、どこの誰だか判らないし、無理はないんですけど」

この男は、もの判りがよすぎた。警官が喫茶店の名をきいて、さつそく出かけていった。バーテンと、額に傷痕のある（戦傷といふ）二十八九の童顔の男をつれて来た。殴った、殴らないの争ひが、しばらく続いた。巡査が中はいった。

「鍵をかけて殴るつてえのは、暴行罪と不法監禁罪だ」

連中は、黙つた。

「日本はまだそんな国ぢやねえぞ、何のためにお前らが税金を払つて、警官があるんだ」これは、殴られた当人へ言つた言葉。「うん？ 勘定が足りないなら、足りない、喰ひ逃げなら喰ひ逃げと、なぜすぐこゝへ連れて来ないのか。勘定の代りに、背広を脱げの何のつて、強盗だぞ」と、殴つた方への言葉である。つづけて巡査は言つた。「あんちゃん、おめえ、そんなに腕が鳴るのか。そんなに腕が鳴るんなら、交番にかかつて来い。うん、お前、柔道何段だつて？ おめえには、目ざはりだらう、交番なんか。交番なんか潰しに来ねえか。うん？ こら、あんちゃん、どうだ、一つ外でやつてみるか。少し骨つぶしは強いぞ。どうだ、やつてみるか」

バーテンは無言で、うらめしさうであつた。

「とにかく客引きをしたんだから、営業停止だ。朝までそこに立つてろ」

物わりのいい、殴られた方が言つた。

「いや、その、私はなにもことをあら立てようと思つて来たんぢやないので、その、おまはりさんが、森の石松みたいな、いきなり立ち上つて、この二人を連れて来たんて……」

「なに！ 石松だつて？」

「ハイ、すみません」

「君は殴られたつていふから、調べてやつてんぢやないか」

「私も弱いわけぢやない。ただ私が金を払はなかつたから……」

その時、一度通りすぎた高級自動車が迂回して、交番の前にとまった。中から、小柄だが、寸分の隙のない紳士が降りて来た。一度も土の上を歩いたこともなさうなよく光った靴。眉が濃い。はきはきと振舞ふ性質らしい。こんなところに来る人間ではなかつた。交番の人々は、一瞬氣をのまれて、紳士を眺めやつた。

紳士はかなり若いらしい。が、その堂々たる態度は、五十男のやうだつた。湯上りのやうな、さつぱりとした顔をしてゐた。意志の強さうな唇だ。紳士は他の人間に眼をくれず、

「緒方、何をしたんだ」

若い、背の高い青年が、電流に触れたやうにはつと立ち上つた。両手を軍隊式に、両腰にびたりとつけて、

「はい」と応へた。

「何をしたんだ、喧嘩か。酔つばらひか」

「いいえ、見物です」

「見物？ 交番で、この夜更、見物してゐる奴があるか。早くかへれ。時々うちをあけると聞いてゐるが、こんなところにあるのか。皆さんの職務の妨害だ」

「はい」

かたなしである。緒方と呼ばれた青年が、交番から出た。

紳士は、自動車にもどつた。車の中には、洋装の女が待つてゐた。そこらあたりに見かける種類の女ではなかつた。女は交番には関心をもたず、無表情に、前方を眺めてゐた。冷たい美貌だつた。

この夜更、どうして古久根があの女と同車してゐるのか。緒方衛司は走り去る車を見送つた。

深夜自動車をひらふには、交番の前に限るのである。その筋の人かと、運転手は決して雲助に化けることがない。もつともこの頃では、自動車強盗でないと運転手に知らせることの方が、大切である。両方をかねること、緒方はやつた。

中野桃園町まで、車が来た。緒方は遠いところで、車を捨てた。月のあるのに気がついた。雲が走つてゐた。夜明けには、まだかなりの時間があつた。そんな時間に邸町を歩いてゐると、隣近所の犬が吠えたてゐるのだが、今夜はどの犬も、静かであつた。わが家に近付いた。裏門の鍵穴を、暗がりできがしてゐると、すぐそばで、火がついたやうに犬が吠えたてた。

「ベソ、ベソ、間違へるな」

犬は鳴きつづけた。やつと、裏門をあけて、顔を出した。

「バカだな。お前は。そんなに鳴いては、氣まりが悪くて、ひつこみがつかないぞ」

とたんに、犬は鳴きやんだ。氣まり悪がつてゐた。眼を伏せて、尾を振つた。わが家の人間に吠えつくなどと、何といふ輕率なことか。ねぼけまなこの鼻先で、鍵穴が怪しく鳴つたので、たしかめるより先に吠えついたものである。犬にも、自尊心があるらしい。恥を知つてゐる。勝手口の鍵穴を、緒方は再び合鍵でガリガリと音をたてた。しのびこむやうに、物音に細心の氣を使つた。うちの中は、まつ暗だ。勝手知つたるわが家である。眼かくしされてゐても、つまづいたり、ぶつかつたりすることはない。台所の揚板が、ごとりと鳴つた。家中にひびき渡つて、ひやりとする。硝子戸を開ける。左手が茶の間、次が家族の居間。廊下が玄關までまつすぐにのびてゐた。居間と廊下をへだてた納戸が、緒方の部屋に当てがはれてゐた。

びたりと襖をしめきつて、彼はやつと落着いた。うちにかへつたといふ氣持になつた。宙に浮いてゐる電燈を、手さぐりにする。見当がつかない。とんでもない見当を手さぐりしてゐる。彼は壁をさすつて、柱を見付けた。柱と直角の見当に、電燈がたれさがつてゐた。簞笥が二タ棹、それに整理タンスが、二方の壁をふさいでゐ

た。床もなければ、押入もない部屋である。最近に増築した粗末な納戸であつた。緒方の洋服が、壁にさがつてゐた。窓が一つ。その前に安物の机があり、彼のふとんは、たたまれた上に、大風呂敷がかむせてあつた。学生下宿を思ひ出させる。寝巻にかへる。ツンツルテンの白つぽい浴衣の寝巻。あかりを消して、さつそくねどこにもぐりこむ。あれは、たしかに社長の自動車だつた。乗つてゐたのは、社長の女だ。以久田吟子。冷たいね。だが、美しい女だ。何か事件を起しさうな女。映画や芝居の中だけに见かける妖婦型の女。現実にもやはりゐるものだ。自然が芸術を真似るのか。映画が現実を真似るのか。

睡魔が襲つてきた。きれぎれに、彼は思ひ出してゐた。あの時間に、社長の女、社長の車、それに古久根恒……？ 拙いところを見られちやつたよ。しよつ中交番で脂をうつてゐると思はれただらう。拙かつたね。眠りにひきこまれていく感じが、判つてゐた。快い瞬間だ。夢の中と現実の区別が、あいまい模糊となつていく。醒めてゐるつもりが、すでに夢の中にはいつてゐる。手を動かしてみる。現実の感覚をたしかめる。次の瞬間は、まったく眠りの中に落ちてゐる？

どこかの部屋の襖が、開いたやうであつた。緒方はうつつに聞いてゐた。次に、どこかの扉の音がした。古久根だ。先に帰つてゐる。あれからまづすぐに彼は帰宅したのだらう。物音は、奥の部屋から聞えてゐた。緒方の聴覚神経が、やがて中断された。物音が聞えなくなり、今度は彼が眠りの中へ戻つていく番になつた。すると誰かが、廊下をこちらへ向けて歩いてくるではないか。錯覚？ はつきりと聞えた。しかも、それは尋常な聲音ではなかつた。泥棒ではあるまい。明らかにうちの人間の歩き方であつた。しかもなほ、聲音を殺した歩き方。枕をつけてゐるので、緒方には微妙に判つた。聲音が応接間の近くまで来ると、やんだ。緒方は聞きちがひだつたやうな気がした。睡魔がそこまで来て、躊躇してゐた。彼は枕から少し頭を浮かせて、物音を待ちかまへた。聲音は消えてしまつた。彼は、枕にもどつた。眠りの迫るのは、防ぎやうがなかつた。眠りに全身を投げ出さうとした瞬間、どこかの部屋の障子が、静かに開いたやうであつた。いや、錯覚だつたかも知れない。うちの中で、

それほど慎重に障子を開ける人間はゐない筈だつた。これも夢の中か。

夢だつたやうな気がした。やがて緒方は、まったく眠つてしまつた。

朝の時間が来ると、緒方は習慣的に眼をさます。我ながら、情ない始末であつた。時には、前後不覚に眠つてゐたいものだ。

「お早う」

女中のサトが、肥つた、がつちりとした割烹着姿で、台所で働いてゐた。台所のまん中に粗末なテーブル、裸の腰掛が二脚出てゐた。緒方はかけると、たばこをくはへた。

「ゆうべは、ずるぶんおそかつたやうですね」

「義兄さん、何か言つてたらう」

従つて、古久根の妻の三貴を、義姉さんと呼ぶのである。

「何かそとでよほど不愉快なことがあつたのでせう。旦那さま、苛々して、おかへりでした。顔付ですぐ判ります。あいにく奥さまがお留守だつたことも、併せて、氣に障つたやうでした」

「義姉さんが留守？」

「奥さま、千葉の海に近い土地をさがしにいらした。手頃な土地が見付かつたといふので、さつそく見にお出かけになりました。今日は多分、おかへりになるでせう」

「宝石を買ふより土地か」

「旦那さまは、奥さまが土地を物色していらつしやるのが、お氣に入らないやうです」

喋りながら、女中は緒方の朝食の支度をはじめた。緒方が機械的に、箸を動かす。食事の終るまでに、彼の弁当がつくられた。この家に厄介になるやうになつた時から、緒方の位置は女中なみであつた。書生であり、下男であり、走り使ひであり、台所以外の部屋で、食事をとつたためしがなかつた。古久根の世話で、緒方は大学を

卒業した。その学資の額に対しても、緒方は生涯犬馬の勞をとらねばならない。

「おかへりになつてからの旦那さまのご機嫌が、いつそう悪くなつたのです。いくらおそくおかへりになつても、家中のものが顔をそろへて、お出迎へもないと、ご機嫌が悪いんですからね。ゆうべは、市瀬さんが泊つてゐました。あれは、二時半頃だつたでせう。いくら旦那さまのおかへりでも、お客さままで起すわけにはいきませんからね」

「なんだ、市瀬の娘さんが泊つてゐたのか。応接間の隣りの六畳だらう？」

「さうですわ」

緒方は、ゆうべの聲音を思ひ出した。合点がいつた。さうだつたのか、だからあんなに気がねして廊下を歩いてゐたのか。あの時、たしかに奥の部屋の、つまり古久根の部屋の襖があいたやうに聞いたものだが、聞きちがひだつたやうである。しかし、疑ひ出せば、疑つてもよい節があつた。たとへば、奥の部屋についてゐる便所は、古久根恒専用の便所になつてゐること。古久根は、客にも、家人にも、使はしたがらないのである。客と家人は、女中部屋のそばの便所を使用することになつてゐた。度々この家に泊つてゐる市瀬千恵が、古久根の便所を、ねぼけて使つたとは思へないのである。が、緒方は市瀬千恵の、まるい顔、白くて、こりつと固いからだつき、農家の庭に咲いてゐる杏の白い花を連想すること、氣持は済んだ。

やがて、古久根が起きてきた様子だつた。女中が茶の間と台所を出たり入つたりした。緒方は、出勤の支度をすませた。

「お早うございます」

茶の間にはいつて、緒方は両手をついた。古久根は大きくあくらをかき、朝刊をひらいてゐた。いかなる時間にも、古久根の髪が乱れてゐたことがなかつた。髭もものびてゐないのだ。つるりとした肌は、女のやうである。湯上りのやうにさつぱりとした感じを与へた。